

常陸太田市武子家文書の保存・調査

西潟 滂

3月15・16日茨城県常陸太田市武子家文書の保存・調査を行った。今回の調査では、以前発見された襖の下張り文書の仮張り作業をした。この文書は前回の調査で一通りクリーニングを終わらせていたが発見された状態では取り扱いが不自由であり、また目録班・写真班の作業が進めにくいことから文書を1枚1枚平らにしていき文字が読み取れ、保管しやすい状態にすることにした。文書を伸ばす作業では仮張りをすることにしたが、それには大きい板が必要になるため大工である武子家に協力して頂きベニア板をお借りした。また、調査に行く前に作業で必要となる道具（糊・不織布・精製水・刷毛など）を話し合い準備した。事前に準備をしていたが、それでも当日は普段とは違う道具や環境で戸惑いがあった。

作業手順としては、まず水作業を行うためにビニールを敷き、文書より少し大きめの不織布（三角コーナーの袋を広げ代用）を置く。その上に裏面が上になるように刷毛で水気をあたえながら文書を広げていく。均等に水気を入れたら上に不織布を置き、不織布の上から液状の糊を付け、下に敷いた不織布ごと持ち上げベニア板へ持っていき乾いた刷毛で撫でながら貼り付けていく。文書が乾燥したらヘラをベニア板と不織布の間に差し込み剥し、更に文書から不織布を剥した。糊を薄めて使用したので文書と不織布が剥れないということはなかった。また、今回扱った文書は襖の下張りだったこともあり、継いだ状態のものもあったがそれは1枚ずつにして扱った。ボロボロになっていた文書は、取り扱いやすいように裏に不織布を付けたままにした。

今までこのような作業を調査会ではしたことがなかったので作業しながらの試行錯誤が続き、手順変更もあった。例えば、ビニールの上に直に文書を

置いて作業していたが持ち上げるときにビニールに文書が張り付きやすいことから、ビニールと文書の間に不織布を置くことにした。また、仮張りする際に付ける糊を端だけに付けていたが乾燥途中でベニア板から剥れやすかったので全体に糊を付けることにした。しかし、そうすることでベニア板から剥す際に板の方に文書がくっついてしまうことがあったので、文書とベニア板の間にも不織布を入れ、文書を不織布でサンドする形にすることで、乾燥後ベニア板から剥しやすくなった。このように、作業しながらより良い手順方法を考え進めていった。1日目が終わった時点で、糊・精製水・不織布などの消耗品が足りなくなり、また刷毛の使う用途が多いとわかったため現地で買い足した。初日は手探りでの作業が続いたが、2日目は手順が確立したので順調に作業を進めることができた。

今回の調査では仮張り作業すべき文書の3分の2が終了し、残りの文書は次回の作業とすることになった。



←水気をあたえながら文書を広げる



↑不織布の上から液状の糊を付ける



↑ベニア板に文書を貼り付けた状態

←ベニア板から文書を剥がす

「佐橋冠左の数寄の世界」

井上 智

2014年5月17日(土)、東京都調布市佐橋邸に於いて「佐橋冠左の数寄の世界」が催された。本宅は個人住宅で今も使われている建物である。このような極めて個人的な建物は、特別の縁故や所有者のご理解が無ければ滅多に見学できないことから、参加を希望した。当日は梅雨を飛び越えたような晴天で、22名が参加した。

まず、主催者であるNPO法人歴史資料継承機構代表理事西村慎太郎氏より本会の開催主旨、続けて「佐橋家文書と歴史資料の継承」と題された報告がなされた。内容は、同機構の活動内容の紹介や民間所在資料の現状、佐橋家文書の調査報告などであった。民間所在資料とは博物館など専門の施設に収められていないもの、つまり一般的な家庭の文書箱や押入などに保管されている資料のことである。三重県や大分県では30年という時間を経た結果、所在確認していた資料のうち20%前後が行方不明もしくは処分されているという報告に大変驚かされ、散逸の原因として所有者の資料への関心が薄れていることが挙げられていた。

休憩を挟んで第2部には、伊郷吉信氏(自由建築研究所代表)とともに佐橋邸の修理設計を行った温設計室薄井温子氏による「旧佐橋邸建物について」という報告がなされた。この報告では、佐橋冠左がお茶室の仕様を決定するために作成した起こし絵が多数残されていることや水車の古材を用いていることなど、佐橋邸が佐橋冠左の芸術観を実現するために細部までこだわりをもって設計された建物であるかが紹介された。薄井氏の報告後、邸内見学の時間がとられ、現在管理されているご家族のお話を伺いながら佐橋冠左のこだわりを間近に拝見することができた。

個人所有の文化財保有は、大切な文化保存形態の一つである。行政が関与すれば一見費用・人員等に問題が無くなるが、他方で、その文化財に纏わる人々の思いがなくなり、財政削減や無茶な耐震補強によ

る文化財の保存との問題も生じる。

今回の報告会に参加して、資料は散逸の危機と研究者へその所在が知られていないため活用されないという事実や、改修費など保存に関する多くの負担があることをあらためて認識させられた。これらの問題は所有者の関心が大切であり、佐橋邸のご家族の話を通じて、所有者が日本文化の保存に意欲的であれば保存の可能性が高まるということを実感した。個人所有者が守ってきた文化、伝統、技術に最大限の敬意を払いつつ、見学会等により情報を広げ、民間レベルでの文化財保護の方法を考える。歴史的遺物が後世へ伝わるように何が出来るかを改めて考えさせられ、非常に得難い体験が出来た。



←薄井温子氏による
「旧佐橋邸建物について」

床の間に佐橋家蔵の掛け軸と
↓佐橋冠左ゆかりの茶道具



←薄井氏による
建物の案内

佐橋邸を管理する
小田切美重氏と
↓西村慎太郎氏



ご参加・ご協力、まことに
ありがとうございました。

民間所在資料の保存・調査活動後のカビに対する対応

西村 慎太郎

民間所在資料は専門の収蔵設備や環境整備が十分でない場合が多く、保存・調査活動の後に虫害やカビ害に遭うことがある。当会じゃんびんでもフォクシングのような斑点が発生している中性紙封筒が発見され、所蔵者と相談の上、2014年5月14日に次のことを行なった

①保管環境と劣化状況の確認。カビの被害があったところは半畳ほどの押入れ2段に11個の中性紙文書箱が収められており、下段の1箱のうち封筒100点にフォクシングが確認された。押入れそのものには湿気は感じられなかったが、湿度が上昇する梅雨から夏にかけてどのようになるか、今後注視する必要がある。

②フォクシングが確認できる文書封筒の交換。フォクシングが確認された100点すべての封筒を交換したが、フォクシングが確認できないものも含め、全点入れ換える必要があったものと思われる。今後、迅速に対応していきたい。

③保管環境の見直し。押入れ底面に直接文書箱が触れることを今回のフォクシングの原因と考え、まずは湿気を取るための備長炭シート(日の丸カーボテクノ製)を押入れの底面の全体に敷き、100×100×30ミリの強度の強いスポンジを文書箱底面の四隅と真ん中の台座とし、通気を確保するように設置した。



↑
強度の強いスポンジ
備長炭シート→



→
押入れ前面にシートを敷き、スポンジを設置した状態



→
スポンジの上に文書箱が載るように設置
この上に文書箱を重ねていく

冒頭にも述べたように、民間所在資料の場合、当然このような問題は発生し、安価かつ容易に環境を整えることによって、状況が改善されるものと思われる。今回の作業も3000円程度で実施することができた。この作業によってどのように環境が改善されるか、今後も検証をしていきたい。

なお、今回の問題点については日野克紀氏にアドバイスを頂いた。心より感謝致します。

活動報告

- 4月1日 ニュースレター『じゃんびん』vol.16刊行
- 4月13日 東京都調布市佐橋家文書保存・調査活動
- 4月14日～15日 静岡県南伊豆町渡辺家文書保存・調査活動
- 5月15日 東洋美術学校にて講義
- 5月17日 「佐橋冠左の数寄の世界」開催
- 5月24日～25日 歴史学研究会大会にてブース出展
- 6月22日 2014年度総会開催・第13回例会開催
- 6月29日 双葉中学校避難所跡記録調査(協力)

- 8月7日 静岡歴史教育研究会報告
(西村慎太郎「民間における歴史資料の保全活動の実践と課題
-南伊豆を事例に-」)

- 8月8日 杉並区蒲生家文書保存・調査活動

その他、毎週水曜日に茨城資料ネットの活動に協力

南伊豆における資料保存の現在とこれから

藍原 怜

2014年6月22日に行われた本例会で、武子裕美さんの報告「南伊豆における史料整理・保存活動のこれまでと今後の課題」を拝聴しました。

南伊豆での史料整理・保存活動は歴史資料継承機構設立以来のもので、これまでも数々の成果を上げてこられました。本報告ではまず、南伊豆で見つかった旧家に残された資料のなかには自治体史にも掲載されていない貴重な資料があり、そうした資料が損失の危機にさらされているため、試行錯誤しながら整理・保全につとめているという興味深いお話を聞くことができました。

また、上記の活動の成果を南伊豆町を中心とした地元の人々に向けて報告する機会として、2007年より年に一度（2008年は未開催）「南伊豆を知ろう会」が開催されています。この会で地元の人々への報告がなされてきた経緯や、報告することによって得られた地元の人々の反応について聞くことができました。

今回の報告で印象的だったのは、過去の「南伊豆を知ろう会」の際に、報告された史料とともに、史料の修復成果をパネルで展示したものが参加者に好評だったということです。今後の展望としては、資料を地域へ伝えていく段階としても、古文書から地域を語っていくことをスタートにするのではなく、資料保全のワークショップなどから導入していくことも考えていく必要があるとのことでした。茨城史料ネットとしても、地域への還元の方法を模索している最中なので、こうした地域住民に対するアプローチの仕方というのは大変参考になりました。

例会の最後には、今後、南伊豆での活動を地域に生かしていくために何が必要かということが話題となり、参加者の活発な意見交換がされました。意見交換に参加させていただいて、資料保全を地域と結びつけていくという目標は、資料保全に関わる人たちの多くが共通して持っているのだということを改めて感じました。



NPO法人 歴史資料継承機構
News Letter
じゃんびん Vol.17

野口雨情生家・資料館特別展示 「長久保紅堂—雨情との友情」 栗原佳

2014年2月8日北茨城市民ふれあいセンターにて「被災した歴史資料が語る北茨城の歴史」が開催されたが、その日の午前に本展示を見学した。

長久保紅堂は『常総新聞』『いはらき』の記者で、雑誌『茨城民友』を創刊して政治腐敗を弾劾した。野口雨情はこの雑誌に「子雁」などの詩を発表しており、紅堂は雨情の詩作に大きな役割を果たしている。この紅堂と雨情の友情を物語る『茨城民友』が展示されていた。生家という雨情の人生を物語る場所に、彼の友人の創刊した雑誌が展示されるというのは大変有意義なことであると思う。

紅堂と雨情の関係は、紅堂にとって親族である赤津鶴寿との書簡でも窺える。本展示では、赤津鶴寿と紅堂の間の書簡が多く展示されていた。その内容は例えば、紅堂は高萩駅前に銅像がある長久保赤水の子孫であるが、赤水に贈位がなされるのに際してのものなどがあつた。この時紅堂は積極的に動いているようであるが、一族への不服を述べている部分もあり、紅堂の心情が察せられる興味深い書簡であつた。また、茨城県政の様相を鶴寿に知らせるなど、紅堂の本職とも言うべき内容の書簡もあつた。

これらの書簡を読むと、紅堂という人は自分の心情を細かく書いているようで、「面白い男」「人懐っこい男」という評判が書簡から見て取れた。午後には西村慎太郎氏によるご報告を聞いたが、予め書簡を見たおかげで随分と紅堂の為人が分かつた。

自分にとって野口雨情は、よく知っている童謡の作詞者という遠い存在であつた。だが、茨城史料ネットの活動に参加することで長久保紅堂の書簡に出会い、その人の友情が雨情につながっていくというのは不思議な縁である。どんな有名人であっても地域とのつながりがあり友情がある。地域の史料にはこうした発見も沢山あるということを再認識した展示であつた。

●発行●

〒198-0063
東京都青梅市梅郷3-863-2西村方
NPO法人 歴史資料継承機構
E-mail: info@rekishishiryo.com
URL: http://rekishishiryo.com/

●発行者●

NPO法人 歴史資料継承機構
代表理事 西村慎太郎
編集: 武子裕美
イラスト: 朝倉麻子